



UJNR水産増養殖専門部会
第42回日米合同会議
事務会議議事録



第42回UJNR水産増養殖専門部会日米合同会議は、2014年9月29日から10月3日まで、米国カリフォルニア州ラ・ホヤとロング・ビーチで開催された。事務会議は、9月30日にラ・ホヤにある米国海洋大気庁南西部水産研究センター(NOAA Southwest Fisheries Research Center: SWFSC)のパシフィック・ルーム(Pacific Room)で開催された。科学ミニシンポジウムは、同室にて10月1日に開催された。ミニシンポジウムは米国 NOAA の後援によるもので、テーマは「養殖業に求められる育種研究の現状」であった。本シンポジウムは、2014年から始まる第9次3カ年計画のテーマである「養殖業における育種研究」の1年目として開催されたものであった。

また、現地検討会は9月30日の午後にミッション湾にあるハブス・シーワールド研究所(Hubbs SeaWorld Research Institute: HSWRI)、次いで10月2日から3日にはSWFSC とカリフォルニア大学サンディエゴ校・スクリップス海洋研究所(Scripps institution of Oceanography: SIO)、10月3日には、アグア・ヘディオンダ環礁にある、ハブスカールスバッド孵化場施設、養殖場施設、太平洋水族館施設で実施した。第42回日米合同会議の科学ミニシンポジウムと現地検討会は、10月3日夕方にロング・ビーチにて終了し、参加者は翌日4日にそれぞれ帰路についた。

日米部会長による挨拶

開会が宣言された後、米国側を代表してマイケル・ラスト部会長が挨拶に立ち、日本側伊藤文成新部会長ほか日本側事務局に対して歓迎の言葉が述べられた。特に伊藤部会長とは今後数年間UJNRでお会いできること、また過去の日本側UJNR参加者とも再開することができたことを大変嬉しく思うとの言葉が述べられた。

ラスト部会長は、これまで1年間にわたり科学ミニシンポジウムと本事務局会議の開催あたり尽力をしていただいた日向野事務局長補佐、ならびにオーリン副部会長へ感謝の意が述べた。また、第42回 UJNR 開催にあたり全般を企画していただいたエミリー・トレンタコステ事務局員へあわせて感謝の意が述べられた。

ラスト部会長から、南西部水産研究センターの建物は新築されたばかりで、今後数年をかけて米国海洋大気庁水産局の養殖研究の役割をもった見学・研究施設として充実される予定であると説明された。また本施設は、米国大気海洋庁によりワシントン州シアトルのマンチェスター、コネチカット州ミルフォード、ノースカロライナ州ビューフォートにある養殖研究所に次ぐ第4の養殖研究を担う姉妹研究所としての役割を持

っていることが紹介された。

ラスト部会長は、第9次3カ年計画のテーマ「養殖業における育種研究」が明日の科学ミニシンポジウムから始まることを歓迎すること、それに関わり育種研究の共同研究が推進されることを希望する意を述べた。ラスト部会長は、育種研究は魚病、餌料、環境管理、資源生産を含む養殖研究全体を顕著に発展させる潜在的分野であるけれども、育種研究は生物を何世代に渡り育ていくために非常に時間もかかることが述べられた。

続いて日本側参加者を代表して伊藤文成新部会長が挨拶をした。伊藤部会長は、新たに部会長に就任したこと、南西部水産研究センターや有名なスクリップス海洋研究所のあるラ・ホヤの地を訪れることができ大変嬉しく思うことを述べた。また、伊藤部会長は、本会議の開催にあたりマイケル・ラスト部会長とラ・ホヤ開催にご尽力いただいたポール・オーリン副部会長およびエミリー・トレタコステ事務局員、ならびに米国代表団へ感謝の意を述べた。

伊藤部会長は、東日本大震災から3年経過しているが、被害を受けた漁村や漁業の復興はまだ道半ばであること、現在水産総合研究センターとしても全力で復興の努力を続けていることを報告した。さらに伊藤部会長からは、これまで米国民からいただいた多大な支援を日本国民は決して忘れることはないことを伝え、この場を借りて改めて米国民へ感謝の意が述べられた。

伊藤部会長は、UJNR 水産増養殖専門部会は長い歴史を持ち、共同研究、交流、シンポジウム開催など多くの成果を上げてきたことを述べた。彼はまた、日米間のこの良好な関係は、日米の水産増養殖研究と水産業の発展に大きく貢献するものであると信じていることを述べた。

伊藤部会長は、本年は第9次3カ年計画の初年度を迎えるにあたり、日本側の提案した「養殖業における育種研究」について米国側と長年協議を重ね、採択していただいたことについて感謝の意が述べられた。伊藤部会長は、初年度の科学ミニシンポジウムでは「養殖業に求められる育種研究の現状」についてであるので、日米双方の研究の見解を述べ次年度のテーマへ貢献したいことを希望すると述べた。

最後に、伊藤部会長は、事務局会議、科学ミニシンポジウム、現地検討会が有意義なものになることを期待し、挨拶を終えた。

参加者の紹介と議事確認

米国側から、マイケル・ラスト部会長からポール・オーリン副部会長が紹介された。それに引き続き、米国側事務局会議参加者の自己紹介が行われた。

日本側から、伊藤文成部会長により日向野純也事務局長補佐が紹介された。それに引き続いて、日本側事務局参加者の自己紹介が行われた。

議事録の確認

ポール・オーリン副部会長から、第42回日米合同会議の議事内容、科学ミニシンポジウムおよび現地検討会の日程の了承が求められ、全員がそれに合意した。

科学交流と文献交換

日本国側から、皆川昌幸事務局員により、この1年間および今後1年以降に3件の共同研究と2件の長期在外研究が行われていることが報告された。また彼は、昨年10月以降、科学シンポジウムあるいはワークショップなどに参加するため、延べ31名の科学者が米国へ赴いたことを報告した。これに追加して、彼から、日本の公設試験機関の年次技術報告最新版の目次一覧が米国側に手交された。また、抄録集は科学ミニシンポジウムの発表要旨集と一緒に提出済みであることが伝えられた。

ラスト部会長から、皆川事務局員へ日米技術交流と文献の提出に感謝の意が述べられた。ラスト部会長は、日本国内の文献情報は米国では入手が困難であるので極めて有益な情報であることが述べられた。また、昨年度の北海道で開催された UJNR 日米合同会議へ参加したメイン大学のダナ・モース博士の研究室の学生が、海藻の養殖研究で日本へ来日する予定であることが報告された。学生はブライン・ケネディー・ワトソンといい、町口博士と長谷川博士に連絡をすでにとり進めているとのことであった。

オーリン副部会長とハブス・シーワールド研究所のマーク・ドロブリッジ氏は、カリフォルニア州において外部寄生虫を制御するアロマティックオイルサプリメントに関する研究を実施するのに、共同研究者と北海道立総合研究機構の水野伸也博士と実施する研究資金を探しているとのことであった。

増養殖に係わる国別レポートの交換

はじめに日向野事務局長補佐から、日本側から提案した増養殖に係わる国別レポートの交換を採択していただいたことについて、感謝の意が述べられた。あわせて、本レポートは、養殖研究を推進していく上で大変有益になることが述べられた。次いで、日向野事務局長補佐から、水産庁発行の白書より引用して作成された2014年国別レポートの日本版について報告を行い米国側へ手交された。さらに、レポートには、水産総合研究センターが農林水産技術会議予算で実施しているプロジェクト研究の課題リストを加えたことが報告された。

ジョーンズ氏より、養殖に関する生産統計、概要、今後の方向性を記した米国側のレポートが手交された。彼は、米国でメキシコ湾と他の海域における沖合養殖と貝類養殖の増進が重要な政策であることを述べた。また、彼は 2013 年のサケ類とカキの生産量の情報が得られ、それらはホームページに掲載していることを報告した。

第41回日米合同会議プロシーディング集出版の進捗状況

日向野事務局長補佐から、第41回日米合同会議プロシーディングについては現在編集集中である、2015年3月までには出版予定であると報告された。また、日向野事務局長補佐から、原稿は奥澤博士がとりまとめており日本の著者から11編全て集あつまっていることが報告された。米国側へ原稿を提出いただいたこと、英文の校閲をしていただいていることに感謝の意が述べられた。皆川事務局員から、原稿のCDが米国側へ手交された。

オーリン副部会長から日向野事務局長補佐と日本側事務局へプロシーディングの編集をしていただいていることに感謝の意が述べられた。また、編集に際しては米国側の協力を惜しまないつもりであることが述べられた。

事務提案とその他

日米両事務局から、事務提案とその他情報提供が行われた。

第43回UJNR会議開催案

伊藤部会長から、第43回UJNR合同会議を日本国で2014年10月下旬もしくは11月に九州北部地域で開催する予定である旨、案内された。九州は、日本でも養殖産業が活発に行われている地域で有名であることから、有益な合同部会になることを期待していると述べた。伊藤部会長から、現在稼働しているクロマグロ養殖施設の説明がなされた。また、施設見学としてカキ養殖場、上浦にある育種研究センター等になるだろうとのことであった。

これを受けてラスト部会長から伊藤部会長へ、第43回合同部会開催の提案をいただき、感謝の意が述べられた。また、第43回合同部会で米国研究者と日本側研究者と研究交流が今後も続いていくことを希望していることを述べた。あわせてラスト部会長は、次回は米国側で不都合がないよう努力するつもりであることを述べた。彼は、特に九州北部へ行くのははじめてなので楽しみにしているとのことであった。

米国連邦政府の養殖研究戦略(2014-2019)

ジェフ・シルバーステイン博士から、ホワイトハウス内の科学工学政策局から連邦政府の養殖研究戦略(2014-2019)が出版され、日本側事務局へ冊子が手交された。また、電子版については事務局会議開催前に日本側へ既に送付済みであることが報告された。彼は、本計画は今後5年間の米国連邦政府の養殖研究戦略であると紹介した。

伊藤部会長から、冊子提供への感謝の意が述べられた。また、伊藤部会長から、日本側で2013年に育種研究戦略を策定したところであることが報告され、皆川事務局員から、その冊子が米国側へ手交された。

水産総合研究センターの再編計画

伊藤部会長から、2015年4月からの独立行政法人の再編について最新情報の報告がなされた。それによる、2015年4月から水産総合研究センターは国立研究開発法人となること、2016年4月からは水産大学校との統合が行われるとのことが報告された。特に水産大学校は、学生、院生、教員構成員、練習船を有しているとのことであった。

ラスト部会長から、最新報告の提供に対し感謝の意が述べられた。ラスト部会長からは、水産総合研究センターと水産大学校との統合が UJNR 運営にどのような影響があるのかについて興味があるとのことであった。伊藤部会長から、今後は教育面での役割発揮も求められることになるだろうと回答が述べられた。

第3回国際アサリ・シンポジウムの開催

渡部事務局員から、第3回国際アサリ・シンポジウムが2015年6月1～2日に三重県で開催予定であることが告知された。渡部事務局員から、本シンポジウムへ米国からの参加を募集すると案内がなされた。なお本シンポジウムは、今年韓国の済州島で開催される世界水産学会のサテライトシンポジウムとして位置づけられてものであると紹介された。

ラスト部課長およびオーリン副部会長から、米国側の養殖研究者へ本シンポジウムの情報を知らせたいとのことであった。

第43回 UJNR 事務局会議への提案

伊藤部会長から、今回のミニシンポジウムにおいて日本の育種に関する情報が得られる筈なので、今回の事務会議で新しい育種研究を進めるための議論を盛り込むことが提案された。特に伊藤部会長からは、養殖魚の育種には時間がかかり、またリスク評価も必要になってくるので、そのための日米間での議論が必要になってくるので提案を行いたいとのことであった。

ラスト部会長から、本提案に賛同の意が表された。ラスト部会長は、育種は養殖対象種の多くの形質を向上させるが、同時に品種改良された養殖生物は野性種と相互作用する筈なのでリスクを明らかにして評価する必要があることが述べられた。

謝辞

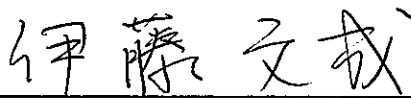
ラスト会長は、この会議の開催に尽力したスタッフ、及び参加者全員と協力者に対し謝意を表した。また、通訳として両国の意思疎通に尽力したミチコ・シャープ女史に謝意を表した。伊藤部会長からも、日本側事務局員、及び参加者の有意義な議論に対し、並びに通訳者に謝意を表した。

閉会

すべての協議が無事終了し、第42回UJNR水産増養殖専門部会日米合同会議事務会議は閉会した。この議事録は2014年10月3日に米国カリフォルニア州ロングビーチにおいて署名された。



米国側部会長 マイケル・ラスト



日本国側部会長 伊藤 文成